

陸自駐屯地紹介シリーズ 第51回

ここに日本の機甲師団あり 東千歳駐屯地

第7師団各部隊他

駐屯地シリーズ編纂委員会

はじめに

30年ほど前前のことになる。幹部上級課程では戦術教育で「敵」は「敵」對抗部隊「甲」を前提としていた。具

のあたりにしたいと願っていたが「駐屯地シリーズ編纂委員」として訪問することが叶った。

体的な国名は伏せていたものの「旧ソ連軍」を仮想敵国としていたことは明白であった。敵の特色は、我が自衛隊に比して圧倒的な機甲・火力戦力を擁していることで、多くの学生が「まともなぶつかれば勝つことは難しい」と感じていたに違いない。口に出さなかつたのは「自衛隊幹部として何があっても我が国を守り抜く信念が揺らいでほならない」という矜持ゆえであった。そして願っていた「せめて地形と時と戦法の助けを借りれば勝負になるような部隊を整備できないものか」。

その戦力整備を黙々と励み続けた部隊の一つが東千歳駐屯地に司令部を置く陸上自衛隊第7師団で、昔日に比し目覚ましい変化を遂げ、精強な機甲部隊としての姿を整えたという。ぜひ目

東千歳取材は6月初めに案を立てたが、その後新しい第7師団長山本洋陸将自77が着任された。筆者はこの方が前任の東北方面総監部幕僚長時代に、一度は震目駐屯地での東北方面隊創立記念日取材のおり面識を得、続いてその数カ月後岩手・宮城地震発生後災害派遣中に緊急取材を申し込んだ時、「災害派遣担当者が出払っているから私が」と自ら対応頂き、お陰で東北方面隊が災害復興に大奮闘している様子を全国の偕行社会員に紹介できた。その將軍が陸将に昇任され第7師団長として着任されたのである。継続してシリーズを担当させて貰っている真利に尽きる。師団広報班への取材申し込みに応諾の回答を頂き、次いで数日後取材時程の予定と共に、師団長、副師団長(駐屯地司令)、幕僚長にお会い頂けること、戦車射撃を見学でき

る等の連絡を頂き喜びは頂点に達した。

取材前、グランドヒル市ヶ谷において偕行社総会に続き防大同期生会があり、そこで第7師団長を勤めた元陸上幕僚長藤縄祐爾氏(偕行社会員)に東千歳駐屯地のことを聞いた。彼は「全隊員が機甲師団の一員である誇りを持っていること」と「千歳市を始めとする地域の絶大な協力」について熱く語った。取材意欲はいよいよ昂揚した。



機甲部隊の威容

千歳市概説

千歳市は北海道の空の玄関で空自千歳基地の所在地であり、更に数個の陸上自衛隊駐屯地並びに演習場が近接していることは多くの読者がご存知であろう。石狩平野の南端部に位置する東西に細長い市で、西の山岳地には支笏湖があり、中央の平地部には空港と市街地、東の丘陵部には農地と原野森林が広がっている。約595平方キロのうち山地と原野で350平方キロ、人口は約9万1千人の内、15歳から64歳の労働可能人口は約6万3千人で全道一平均年齢が若い都市である(平成17年調べ)。

現在、市は「空港と共に繁栄する」「自衛隊基地・駐屯地と共存する」「先端の科学技術とこれを取り入れた工場を誘致する」という3つのテーマを見据えた市政を推進中とのことである。 一帯は札幌市地域に僅か遅れて開拓が始まり、明治13年に戸長役場という名の役所が置かれた。その後地味な開拓事業が続けられていたが、大正14年海軍航空隊の施設が

設置された。終戦となり米軍が進駐したが、昭和29年米軍主力が撤退し37年真駒内から第7師団が移駐し、変遷を経て現在に至っている。

東千歳駐屯地訪問の前に

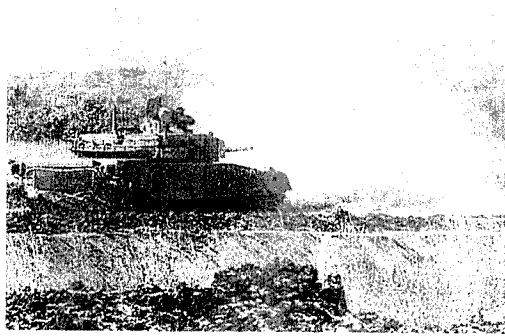
取材日の朝、千歳駅で師団広報班長北原偉男3佐の出迎えを頂いた。約40分の走行で北海道大演習場島松地区の戦車射場に着き、恵庭岳を遠望する景色に大気を吸い込んで宏大な気分を味わった。

集結地に至る道路脇に4両毎のグループとなった戦車が集結していた。間近にみる戦車は筆者が幹部上級課程の頃、最新式の国産戦車として目にしたものとは異なり、砲塔は低く、積んだ砲の長さ、口径の大きさに威圧される感じを受けたのである。「砲塔の中を見た」との言葉を飲み込んだ。砲塔内は秘密で元自衛官とて近づいて良はずがない。とはいふものの覗いて見たいほどの精悍さがあつた。

所々に6人用天幕が張られていた。前日から射撃警備のために野営していた要員のものだという。前夜は雨が激しかったようで水が流れた跡があり野営には難儀したことであろう。射撃場には高さ約3呎、幅4呎、長さ30呎の土手が築かれ、これが射場全体を見渡せる見学台となっており、その左端には3脚の上に据えられた射場監視の砲

隊鏡と監視要員が配置されていた。

集結位置から戦車は見学台に平行に進出し射撃待機位置につく。突然4両が一斉に前進を開始した。先頭戦車も最後尾戦車も寸秒違わず一斉に前進を開始したことに練度が感じられる。戦車砲は進行右方向90度横の標的の方向に向いて走りながら1発ずつの射撃を実施した。一番近い戦車まで筆者の位置から約30呎、広報班長が耳栓を準備してくれていなければ鼓膜が悲鳴を挙げ



戦車射撃

たであろう。強烈な音と光であつた。射撃が終わると急速に前進を開始し、再び小停止、1発ずつ発射した。戦車のままで約2千呎はあるだろうか。借用した眼鏡を覗くと的から白い煙が上がるのが見えた。命中したのであろう。

続いて搭載機銃の射撃、近くの人員的

に対して雨の如く曳光弾が降り注ぎ、遠くの戦車的に対して赤い光の尾をひく曳光弾が吸い込まれると間髪を入れず戦車砲が発射された。

各戦車5発ほどの戦車砲射撃が終わる、どうやら安全点検と見える空白時間過ぎると、前進位置から我々見学者の方向に戻ってくる。砲塔ハッチから身を乗り出しているのは車長、4両は小隊であり小隊長は3尉、又は曹長であるという。一昨年山本会長が幹部候補生学校卒業式で祝辞を述べられた88期の若武者が混じっているかも知れなかった。砲塔から身を乗り出して走る戦車小隊長は表情が硬く引き締まっていた。近日中に迫った射撃競技会に向けて今回の錬成射撃を反芻しているのであろう。

この射撃を数回見学した。慣れていないせいと耳の中で蝉が激しく鳴き始めた。この射撃実施部隊は第7師団隷下ではあるが東千歳駐屯地部隊ではなく石田裕1佐指揮する北恵庭駐屯地部隊の第72戦車連隊であつたが、何時になるか分からない恵庭駐屯地取材時に先送りするに忍びないので、印象が強烈な今回記述することを容赦願いたい。なお、取材後に実施された戦車射撃競技会では、この72戦車連隊が優勝した由である。心からお祝い申し上げた

駐屯地周辺事情

戦車射場から駐屯地へ向かう途中、日常の訓練で装軌車が使うC経路を辿った。街中を通る舗装道路と何ら変わりなく、民間車両の通行も頻繁で、経路に沿って民家、商店もある長閑な市街地である。自衛隊装軌車は方向を変える時、後尾部分を大きく横にふり、これが停止している民間車両にぶつかればメチャメチャになってしまう恐れがあるとのこと、尋ねてみた。「部隊行進の時の交通規制や騒音に対して苦情や妨害はありませんか?」。無いとのことであつた。しかし部隊が行進する時は、交差点に誘導員を配置する等細心の注意を払っていると聞いた。

駐屯地正門を通過すると「限定展示」という取り扱い区分で今も現役の装備品である戦車、砲、航空機等が多数展示されている。第一印象は「広い!」であつた。

駐屯部隊

東千歳駐屯地には多くの部隊があるが、まず第7師団隷下の部隊を挙げる。

第11普通科連隊

第7師団でただ一つの普通科連隊で連隊長は井上一1佐である。装甲車化されていることを誇りにしていることが窺えた。

第7特科連隊

砲は装軌自走化されており、標竿を

建てるなど無しに陣地進入後直ちに火力を発揚できる。連隊長は大野幸生1佐である。取材日の3日ほど前「5日に矢白別演習場まで行く余裕がありませんか?」。聞けば99式自走砲の射撃訓練があるという。絶好の取材テーマであったが予約した変更不可の航空券は5日午後に千歳着で、足を伸ばす時間が無かった。残念でならないが、駐屯地がそこまで偕行社の取材に配慮して頂いたことを付記したい。

ある。
第7化学防護隊
隊長山口英輝2佐指揮のもと師団の化学防護を行う。
第7後方支援連隊
第7師団全般の補給・整備・回収支援を行う。高度に装軌車化された師団を支援する補給整備等膨大な支援所要を果たす機甲師団必須の部隊である。連隊長は寅岡一也1佐である。

第7高射科連隊
師団の直上を対空掩護する部隊であり、平常は対空射場に近い静内に連隊長小林俊也1佐以下が所在しており、高射自動火器の他、ミサイルを装備している。

第7師団司令部付隊
隊長村田健二3佐指揮のもと、師団司令部の移動、保管、警戒を担当する。
第7音楽隊
日常は第7師団管内で音楽演奏を行い広報任務に忙しい部隊である。

第7偵察隊
師団の前方又は側方に展開し、偵察掩護に任ずる部隊で、オートバイの他、装甲車化されている。偵察隊長は大北知文2佐である。

第1高射特科本部
小原繁陸将補指揮のもと、方面隊全般の対空戦闘を行う北方方面隊直轄部隊で、指揮機関の団本部と射撃実施部隊の1コ群を東千歳、1コ群を名寄に配置している。
第1高射特科群
中野重友1佐の指揮のもと、第1高射特科団隷下の射撃実施部隊である。

第7通信大隊
師団全体が装軌化されている部隊の通信支援を行い通信を中継する任務を持つている。大隊長は児島隆幸2佐で

第1電子隊
渡邊辰悟1佐指揮のもと、方面隊の電子戦を行う。

第7通信大隊
師団全体が装軌化されている部隊の通信支援を行い通信を中継する任務を持つている。大隊長は児島隆幸2佐で

第1電子隊
渡邊辰悟1佐指揮のもと、方面隊の電子戦を行う。

北部方面教育連隊

野口利保1佐指揮のもと、北部方面管内の新隊員教育、陸曹候補生教育、陸曹教育等を行う。
第101高射直接支援大隊
鴨崎浩志3佐指揮のもと、高射団の主として補給整備の支援を行う。
第324会計隊
加納俊法2佐指揮のもと、在東千歳部隊の会計業務支援を行う。
北部方面指揮所訓練支援隊
三浦直人1佐指揮のもと、方面隊及びその隷下部隊が指揮所訓練を行う際の状況付与などの支援を行う。

千歳駐屯地業務隊
厚芝清1佐指揮のもと、東千歳駐屯地の総務、広大な土地建物の管理営繕、駐屯部隊の補給、管理、厚生、衛生及び受け持ち演習場の管理など膨大な業務を行う部隊である。
師団三役表敬

午後最初の時間に表敬の時間を設定して頂いた。師団長は前日、矢白別演習場(道東別海町にある演習場)で特科連隊の射撃訓練を視察しておられたという。「インタビュウのため差し繰って戻られたのでは」と恐縮極まりない思いがした。階段を上り師団三役の執務室が並ぶ赤絨毯廊下の一角から応接室に入った。師団長に就任と陸将昇任のお祝いを申しあげ、新しい名刺

を頂いている最中に、副師団長兼ねて東千歳駐屯地司令西村智聡陸将補、師団幕僚長立花尊顕1佐が入室された。重い職務に就いている方々に揃ってお会いできる偕行社取材ならばこそその意味を感じながら椅子についた。
統率方針
先ず第7師団について師団長のお考えを聞いた。多くの先輩方が築かれた

「北方対処」の切り札であるばかりでなく、今や我が国唯一の機甲師団としてまさかの折りには国内の何処へも機動すべき地位役割を分析しておられるように推察した。千歳空港、小樽港、苫小牧港はその重要発地なのである。重装備の7師団について兵站所要等で「師団が重い」とは考えておらず、平素から職種連合のチームに習熟させる事でむしろ初動「師団は軽快」な部隊である事を説いておられた。



山本洋第7師団長

次いで、千歳市など地方自治体との関係について伺った。自衛隊駐屯地・基地との共存を打ち出している千歳市長山口幸太郎氏の考えは広く市民に理解されており、隔々での協力を得ていること等を説明頂いた。

師団長としての統率方針は広報班長から伺っていた「諸官とともにあり」であった。一見禅問答の公案に近いこの短い表現には、訓練に励む隊員一同にとつて限らない重みがある。「我々の流す汗は師団長に届いている」という信頼感・一体感呼び起こす言葉である。そのことを示す写真が司令部正面玄関に掲示されていた。着任以来短い期間に果たされた視察の写真で、中に第11普通科連隊長井上1佐と共に89式装甲戦闘車のハッチから上半身を乗り出してC経路を走行している一枚があった。写真の中の師団長は鋭く路傍を見回して部隊が街中を走る実態を自ら体感しておられるのであろう。

副師団長兼ねて駐屯地司令から地域との連携について補足があり、山口市長は「北海道自衛隊駐屯地等連絡協議会」の会長として大いに活躍され、「千歳市における自衛隊の体制維持を求める期成会」の会長も務めておられること、また広い駐屯地・演習場を維持管理することの重要性についても伺った。

駐屯地司令としての要望は「規律厳正にして
活気に満ちた駐屯地」

「親しみやすく
地域と共に歩む駐屯地」

「緑とやすらぎのある駐屯地」

後にこれら要望事項が着実に成果をあげている事を肌で感じたのである。

幕僚長からこの駐屯地創立記念日において、駐屯地内にある旧滑走路上において戦車が5列縦隊で行進すること、おおい、写真の手配もして頂いた。自衛隊記念日においてさえ戦車は2列である。最新式戦車が5列縦隊で行進する姿は壮観であろう。

表敬の時間は瞬く内に過ぎた。お三方に階段降り口まで見送り頂いたことに偕行社に寄せる厚遇を感じ、恐縮しつつ、隊内見学に向かった。

駐屯地風景



西村智聡駐屯地司令

隊内見学は、車に乗せて頂いた。広大な駐屯地で徒歩ではとても廻りきれものではない。

師団司令部庁舎玄関の屋根に横長に「機甲師団」の看板がかかげられている。そこから僅か走り出した右側奥に石碑が目についた。殉職者慰霊碑だという。サッカーコートほどの広場の長辺に石段があり慰霊碑が建立されていた。車を戻して貰い、心を込めて拝礼した。

走りだすと、目を引いたのは整備工場が随所に見られたことである。各部隊が装軌車を装備していると、このように多くの整備工場が必要となることを改めて感じた。広い地域は幾つかに区分され、それぞれに隊舎、整備工場、装備品の駐車場、私有車駐車場、食堂、売店などが配置されている。第11普通科連隊の隊舎の前を通過した。正面玄関屋根上に誇らしげに「機械化連隊」の看板が掲げられている。装甲戦闘車で驚進する機動ぶりが想像できた。

駐屯地創立記念日等で観閲式を行う広場にでた。観覧席となる広い堤の上には鉄製の観閲台が設けられている。これもかなり広い。部隊が整列し行進する経路は2千x80ほどの広さがある。幕僚長から教えられた5列縦隊の戦車の行進が見られるのはこの場所である。戦車の行進と時を同じくして上

空を第7飛行隊及び第1対戦車ヘリコプターのヘリが通過するという。地上と空中からの轟音はさぞ壮大なことであらう。



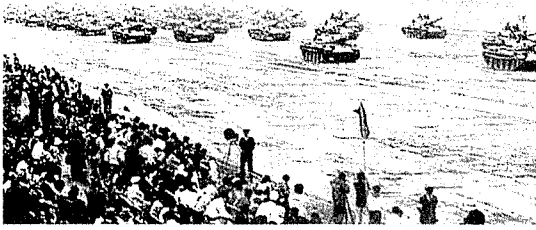
潜水渡河中の戦車

駐屯地内を巡りながら考えた。これだけ広大な駐屯地の維持管理には、境界・外柵・道路・排水側溝など敷地の管理、隊舎・整備工場・食堂・浴場等の管理営繕、配電・給水及び排水・暖房・防火・塵埃処理、消防・駐屯地警備など駐屯地に関する業務、担当する演習場の使用割り当て・使用規律の維持・演習場使用に際しての特に夜間射撃など周辺自治体及び町内会等への広報・説明、さらには現在明白となっていない千歳市都市計画構想との競合、今恐れはないようであるが基地反対運動画策の動きの察知など広範多岐に涉

る膨大な作業があるのではないか。本
当にご苦労さまと眩いたことであつ
た。

地域の人々とのふれあい

駐屯地と地域の人々との触れ合いに
最大のイベントは駐屯地創立記念日
で、中でも市民を集めるのが観閲行進
であろう。戦車を始めとして多数の装
軌車が轟音を立てて行進する姿に魅了
されるようだ。この日行われる「おら
が町の物産展」には近隣の市町村の職
り旗が立って名産が販売される。他に
もチビッコキャンプ、市民と一緒に駐
屯地盆踊り大会、千歳市民夏祭りへの
参加など、市民との触れ合いも盛んで
ある。



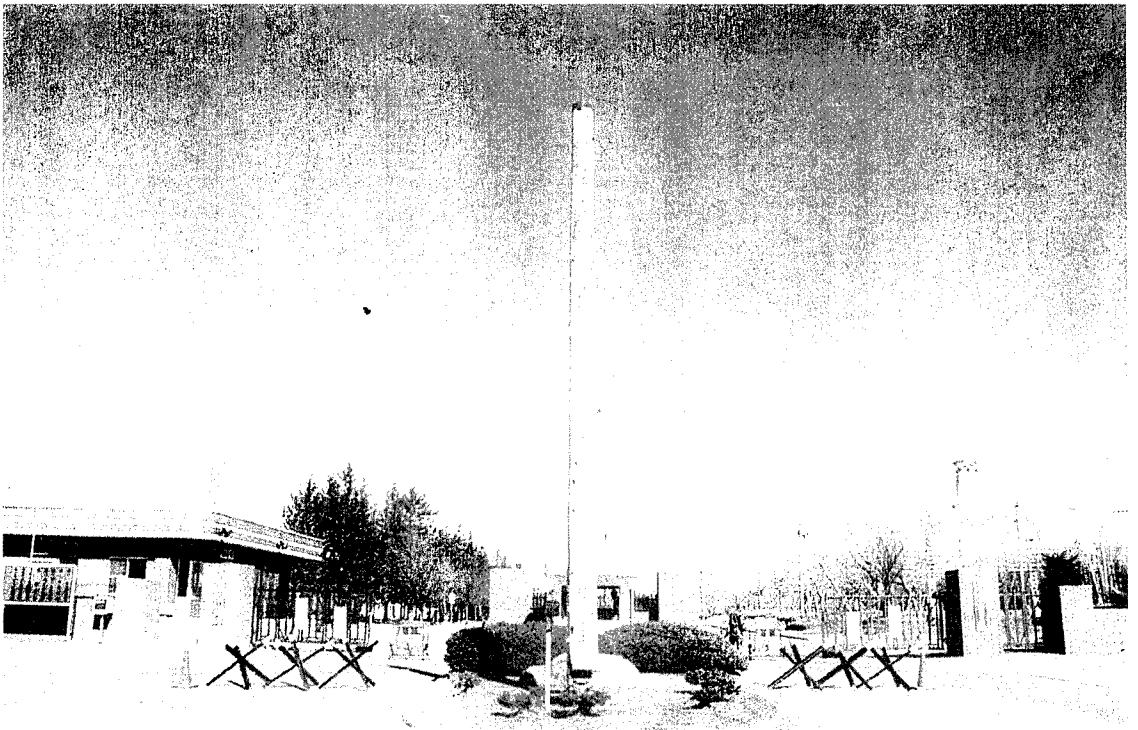
創立記念日 市民も参加して盛大に

取材を終えて千歳駅まで送って貰う
途中寄り道をして「千歳サケのふるさと
と館」に案内された。千歳屈指の観光
名所である。だが観光のために案内さ
れたのではなさそう、途中から常務
理事の栗原敏行氏が説明に立たれた
が、後半に近日展示される自衛隊広報
写真パネルについて調整を兼ねての説
明が始まった。パネルは新聞全紙判の
大きさのものが約20枚、観覧順路の縮
め括りの場所に張り出されるとの話で
あった。特に偕行社に見せたいとの扱
いが明白で、この寄り道で広報班長が
語りたかったことは、駐屯地の広報活
動に市などからも最大の協力を頂いて
いることではなかったか。駅に向かう
短い車中、現在の姿を作り上げた歴代
駐屯地司令以下の各位、特に駐屯地業
務隊総務関係者、広報関係者の努力の
積み重ねを改めて感じた次第である。

終わりに今回の取材にあたり、前記
師団三役にご多忙な時間を頂いたこと
について心から感謝し、第7師団が外
敵を一蹴しうる訓練に邁進されること
を偕行社会員とともに祈念したい。

取材後も再三FAXで煩わせた師団
広報班長北原3佐に感謝申し上げます。
同期生藤縄祐爾氏から取材に先立ち意
欲を掻き立てられたことも再筆する。

文責 松村興延陸自64



正門「我らここに励みて国やすらかなり」のトーテムポール